

第3章 スノークールライスファクトリー構想の実現要因

合使大介

はじめに

本章は、スノークールライスファクトリー構想がいかにして実施されたのか、その要因を、主導的に進めた人々の工夫・努力の外側に求めようと考えている。本章では主に、①JAや組合員（各農家）など沼田町の農業に関わる風土的・農業的な要因、②莫大な予算を投じざるを得ないスノークールライスファクトリー建設を達成できた財政的な要因、③議会が構想を承認し、推進できた政治的な要因、に焦点を当て、スノークールライスファクトリー構想を実現させた要因を明らかにする。

3.1 スノークールライスファクトリー構想実現の風土的背景

3.1.1 沼田農業の在り方

沼田町はスノークールライスファクトリーができる以前から、地域ごとに結成された農事組合を単位とした協同による農業経営が行われる風潮があった。それは沼田町の開闢過程にも起因するが、最近でも田植えや収穫などをある程度協同して行っていた。スノークールライスファクトリーは各農家の収穫した米の全量を一ヶ所に集めて乾燥し、ホクレンに出荷するという集約施設である。農家同士、あるいはJAに対する信頼が強固でなければ成立しえない仕組みであるが、上記のように沼田町の伝統的基盤により、それが可能になったと考えられる。

また、それらの信頼を土台にし、沼田町的全農家が生産した米の全量を入れることができることがこの事業を“成功”たらしめている最大の要因の一つとも言えよう。

3.1.2 JAも願っていた貯蔵施設

スノークールライスファクトリー構想は篠田久雄町長からJAや沼田町議会等に提起があったのだが、その原点となった構想自体は当時の岡田静夫組合長や岩腰壮康営農部部長らJAとの共同立案であった。

当時の沼田町では、歯止めのかからない米価下落への対応策として町全体の米の品質向上を模索しており、JAや生産組合などを中心に米の集約型乾燥施設を願う声があった。ここでJAと篠田町長との相談があり、現在のスノークールライスファクトリー（当初は雪という発想はなかった）構想が動きはじめた経緯がある。そしてJAを中心に米の集約型乾燥施設を目指すプロジェクトチームが立ち上がっていた。

つまり、篠田町長から構想が持ち上がる以前より、JAでも米の集約型乾燥施設を創ると

いう構想があったのである。もちろん JA の描いていた構想には“雪”という単語が見られるわけでも、現在の施設ほどの規模でもなかった。歯止めのかからぬ米価下落による農家の収益をなんとか向上させたいという熱意のもと、JA に集まる米の品質を均質にすることで価格を落とすことなく出荷できるように、籾の段階で集約的な乾燥をできる施設を構想していた。これが意味するところは、スノークールライスファクトリー構想は、篠田町長の完全な独自の発想ではなく、JA もかねてより願っていた構想であって、互いにその発想に乗り合った末に洗練されていった構想であるということである。

3.1.3 全量納入への弊害クリア

スノークールライスファクトリー建設にあたり、農家からの危惧は当然ながらあった。各農家の米を一手に集約することもそうであるし、預けた米に万が一のことがあった時の責任問題なども当然ある。それらについては、岡田組合長を中心に、JA が各部落懇談会に出向いて説得にあたった。スノークールライスファクトリーに入れてからのトラブルについては全て JA がその責任を負うことなどを明確にし、農家が安心してスノークールライスファクトリーに米を入れることができる仕組みを整えたことも成功の大きな要因であろう。

3.2 スノークールライスファクトリー構想実現の財政的要因

3.2.1 沼田式予算

スノークールライスファクトリーの建設には、最終的に総工費 16 億 2300 万円もの莫大な費用が投入された。それだけの額を沼田町や JA が単独で支出することはまず不可能である。今回の場合、ウルグアイラウンド対策費用という国からの補助があるとはいえ、それでも沼田町規模の自治体や JA にとっては大変厳しいものである。JA や民間企業、法人などではなく、沼田町の持ち物とすることで、固定資産税の免除など施設自体が負担するコストを大幅に削減でき、イニシャルコスト以外には大きなコストを要さない仕組みを確立できた。このような国の補助金と沼田町出資で折半するという画期的なシステムは特筆に値する。規模の面でみると、かねてより JA で構想されていた米の集約型施設は、JA の事業規模からしてそれほど大規模なものではなかった。現在のスノークールライスファクトリーほどの収容力を持つ施設は JA ではなしえなかったのである。また、手数料の面でみると、イニシャルコスト以外に大きな出費をとまなわないため、沼田町の農家負担を大きく軽減させることができた。それもまたスノークールライスファクトリーを成功させた要因の一つであろう。

3.2.2 “世界初”という効果

先述のとおり、スノークールライスファクトリー建設には莫大な費用が投入された。うち半分は国からのウルグアイラウンド対策費、残りの半分は道からの補助と、過疎債や基

金等を含んだ沼田町負担である。しかし、スノークールライスファクトリー建設には当初 23 億円との試算があった。つまり差し引き約 7 億円の支出削減を達成したことになる。これはスノークールライスファクトリー建設にあたり、建設請負企業の競争入札を実施したことによる。沼田町では、スノークールライスファクトリーは、世界初の雪氷エネルギーを利用した大規模米貯蔵施設であり、これからの北海道を担う施設ということ、メディアを通じて各方面に広める戦略に打って出た。これにより多くの企業が入札したが、“世界初”であるがゆえ、採算は度外視にしてまず新分野に飛び込み、功績を上げることを目指す企業の開拓精神と沼田町の思惑が合致したものと考えられる。その結果として沼田町の負担は大きく軽減された。

3.2.3 国庫補助の有効活用

競争入札により、スノークールライスファクトリー建設にかかる沼田町の支出は大きく軽減されたが、それ以上に重要なことがある。それは、純粋な沼田町の持ち出しが極めて少ないことである。沼田町はかつて炭鉱の町として知られ、現在ではその全ての炭鉱が閉鎖した旧産炭地域にあたる。それはつまり、産炭地域振興臨時措置法に基づく旧産炭地域振興基金が国による措置の一環として積み立てられていることを意味する。また、沼田町は、過疎地域自立促進特別措置法（2000 年から 10 年の時限立法）に基づく過疎債¹、また、豪雪地帯対策特別措置法を根拠とする、特別豪雪地帯地域指定に基づく地方債を発行することも可能であった。また、沼田町はこれらの国庫補助に加え、自衛隊の誘致にも成果を挙げており、それに付随した補助があった。それらの補助金を使った大規模な事業は取り組まれておらず、それらを活用できる状況にあり、スノークールライスファクトリーでそれらを複合的に用いたわけである。

地方債や補助金を上手く使うことにより、沼田町としての純粋な持ち出しを極力少なくすることに成功した。これらの国庫補助金をスノークールライスファクトリーの建設に充てたことは、財政通として定評のある篠田町長の政治手腕が大きく影響したことが考えられる²。

3.3 スノークールライスファクトリー構想実現の政治的要因

3.3.1 沼田町の総意

スノークールライスファクトリー構想自体は篠田町長サイドから沼田町議会等に提起があったが、その構想は、沼田町議会議員の全会一致という形をもって、“沼田町の総意”として進められた。それは 1995 年の町議会議員選挙に出馬表明した全候補者がスノークール

¹ 過疎債は、過疎地域における補助事業、単独事業のいずれにも充当される。交付税措置は元利償還金の 70%程度を基準財政需要額に算入する。

² 元沼田町議会議員久保寛氏（2008.11.14 聞き取り）によると、篠田町長は「お金の使い方が上手い」ということで一目置かれていたという。

ライスファクトリー推進を掲げたことにも現われている。

当時の町議会議員からスノークールライスファクトリーへの反対意見が出なかった理由はいくつか考えられよう。前節で述べたように、ウルグアイラウンド対策費や国庫補助金の活用により、沼田町としての持ち出しが少ない中で画期的な施設を建設できるということも重要な点である。沼田町は、旧産炭地域振興基金や過疎債など多くの財源があり、財政が極度に逼迫した状況にあったわけでもない。スノークールライスファクトリー建設は、沼田町としてある程度許容可能な支出の範囲内にあった。

また、ウルグアイラウンド対策費として計上するという事で施設構想の実現可能性が高まったこともあり、その発案から合意まではほとんど時間がなかったのが実情である。篠田町長や岡田組合長らの主導の下、JA や町役場が総出で話を詰めていった。それゆえ、スノークールライスファクトリー構想は、篠田町長主導で話が進み、それを町議会が審議し承認するという構図になっていたようである。町議会も、沼田町振興特別委員会を設け、同委員会を中心に構想実現に向け、精力的に取り組んだ。冒頭でも述べたように、米の乾燥貯蔵施設を作ることは JA をはじめ沼田農政に関わる全ての人々の切なる願いとなっていたこともあり、スノークールライスファクトリー構想は、沼田町の願いとも言えるものであり、スノークールライスファクトリー構想は、沼田町の“総意”として確立していき、反対の狼煙があがることはなく、“沼田町全体で取り組むんだ”という気運が高まったのである。

3.3.2 議会運営と町長

スノークールライスファクトリー構想の実現を推し進めた“沼田町の機運”を高めた背景には、篠田町長のカリスマ性ともいえるべき非常に強いリーダーシップとそれへの信頼があったと考えられる。特に重要な点は、町長と議会との関係が非常に良好であったことである。町長は町議会議員からの信頼も厚く、実家では農家をしていることもあって、農業のおかれた状況には詳しかったし、理解もあった。スノークールライスファクトリー構想に関する道庁や中央省庁など関連行政機関への陳情にも精力的に奔走し、構想実現に向けてひとかたならぬ熱意を持っていたことも大きい。また、篠田町長には財政運営の確かな手腕があったことが、議会との信頼関係を築く上で重要であった。

3.3.3 議員構成

スノークールライスファクトリー建設の議案が議会を通過した 1995 年当時の沼田町議会の議員構成は表 3-1 のとおりである。定数 16 のうち 8 人が農業出身であり、過半数に達している。このデータが必ずしも沼田町議会は農政寄りということを示唆しないとしても、少なくとも農業・農政に通じた、農業・農政に理解のある人材が多くいたことは確かであろう。当時の沼田町農業の厳しい現状は身をもって感じており、スノークールライスファクトリー建設への意欲も高かったことが推測できる。

表 3-1 1995 年沼田町議会議員構成

氏名	年齢	党派	現・元・新	当選回数	出身高校	職業または団体役員	主な経歴
吉田好宏	62	無所属	現役	2	沼田高校	農業	町農業委員会会長代理・町農協青年部長
杉本邦雄	50	無所属	新人	1	沼田高校	農業・指導農業士	町農協青年部長・土地改良区理事
横山孝生	59	無所属	現役	4	沼田高校中退	農業・町肉牛組合長・空知家畜商理事	町農業委員
久保寛	61	無所属	現役	6	沼田高校	会社役員・町議会建設委員長	町議会副委員長
野道夫	62	無所属	新人	1	深川農業高校	町体育協会会長・沼田ホテル研究所所長	土地改良区参事
室田俊朗	44	無所属	新人	1	拓大短大	農業・土地改良区総代	町PTA連合会会長
橋場守	65	共産党	現役	6	国民学校高等科	深川厚生企業組合事務局長	坑内保安係長
谷口清治	62	無所属	現役	5	深川西高校	会社社長	町商工会理事・沼田高校PTA会長
吉尾政春	54	無所属	現役	3	沼田高校	農業	町農政協議会委員長・空知農民連合監事
山田英次	58	無所属	新人	1	沼田高校	飲食業・町商工会副会長	沼田高校PTA会長
山本一男	52	無所属	現役	3	沼田高校	農業・町スキー連盟会長	沼田高校PTA会長
中村進	53	無所属	現役	3	沼田高校	農業・町国際交流会会長	町連合青年団団長
吉田俊一	66	無所属	現役	8	中央大中退	会社社長	町軟式野球連盟会長
大沼恒雄	39	無所属	新人	1	沼田高校	メガネ店経営	- - -
伊藤初	60	無所属	現役	3	深川西高校	神職・沼田母子会会長	町議会副委員長
森井章夫	43	無所属	新人	1	旭川実業高校	農業・会社員	アマチュア無線クラブ会長

北海道新聞 1995.4.24 及び 1995.6.7 より筆者作成

3.3.4 農業部門以外への配慮と基幹産業重視

スノークールライスファクトリーは、その資金源の 50%をウルグアイラウンド農業合意関連対策費に依拠していることから明らかなように、あくまでも農業部門対策であるという意識が沼田町内には強く存在している。他方、メディアや他の市町村から見たスノークールライスファクトリーは、雪氷を利用した冷熱エネルギーによる先進的な取り組みであることを強調されることが多い。だが、沼田町内では、JA はもとより、スノークールライスファクトリーを積極的に推進してきた篠田町長や岡田組合長らも口をそろえて「スノークールライスファクトリーはあくまで農業（米）へ向けた施設である」と明言している。

上述より、スノークールライスファクトリー構想の推進は、農業部門への投資ということの意味する。町をあげての大事業であるとはいえ、農業部門ばかりに予算を充てるといふ優遇措置を取ることはどうなのかという疑問も一部ではあったようである。前節でも述べたように、沼田町の総意となったスノークールライスファクトリー構想に正面から反対を表明できる状況にもなく、不満は一部の人々の中で燦燦することしかできなかったのである。商工業側への配慮として、町が商工会館を新たに作り、旧い建物を町が買い取るといったことも行われている。

しかし、農業部門への偏重への一部の不満があったとはいえ、不満を抱いていた人々が反対できなかった、あるいはしなかった最大の要因は、沼田町の全体的風潮だけではなく、「沼田町は農業（米）の町」という共通の意識があったことである。かつて町を支えた炭鉱は全て閉山し、沼田町に残されたものは農業、そして米であった。沼田町の基幹産業は農業、特に米であり、「米作がダメなら商業も何もダメになる」という意識は町民の中では非常に強い。それゆえ、農業分野への手厚い比護に対しての強い反対意見などは起こらなかったのである。

おわりに

これまで述べてきたさまざまな要因が重なり、スノークールライスファクトリー構想は

実現を見ることになったと考えられる。総じて言えることは、“沼田町は農業の町であり、農業がダメになれば町として立ち行かなくなる”という考え方が非常に根深く定着しており、沼田町の農業を、ひいては沼田町の未来を案ずる全ての人々の願いの結実がスノークールライスファクトリーとなったのである。

農業・風土に関する面でいえば、沼田町農業の共同労働という土台がなければ全農家・全量納入は達成できず、それがなければスノークールライスファクトリーは採算面でも事業面でも上手くいかなかった。

財政に関する面ではいえば、沼田式と言われる国と町の折半による出資で JA が運営するという仕組みに加え、“世界初”というこれ以上ない付加価値を巧みに利用したイニシャルコスト削減と、沼田町ならではの補助金の活用、そしてウルグアイラウンド対策費にタイミングが合い、小規模な自治体ではあるが財政面の壁を乗り越えることができた。

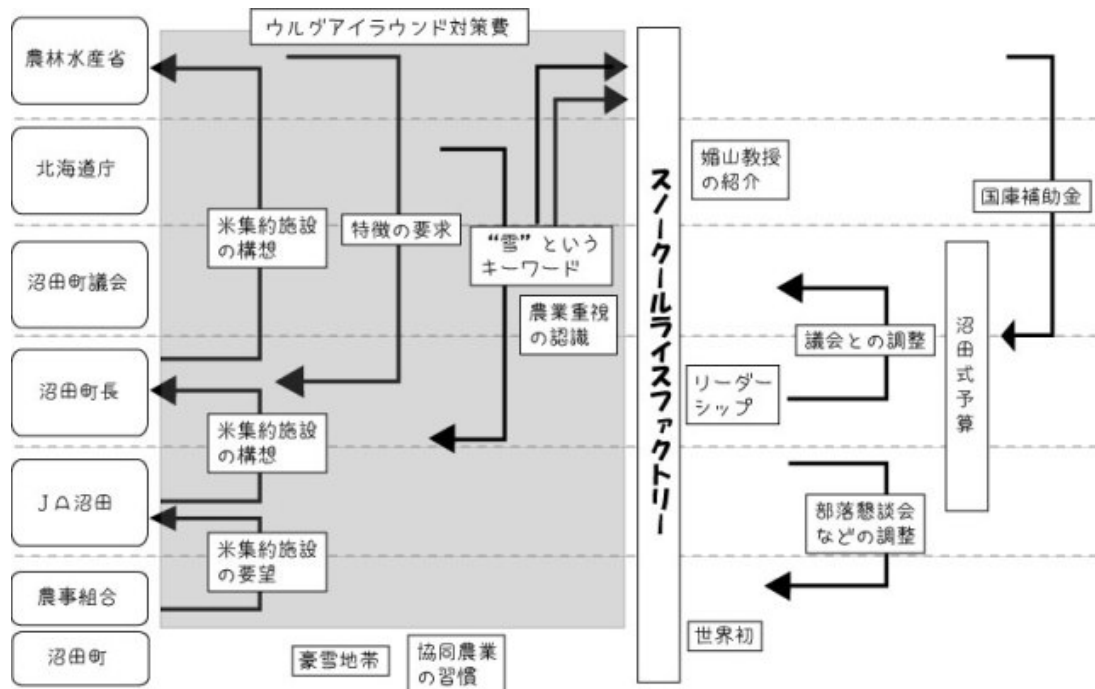
政治的な面でいえば、短期集中審議と町長の強いリーダーシップに後押しされた構想の推進を、基幹産業（農業）の維持・発展を誰もが願い、“沼田町の総意”として取り組むことができたからこそその成功である。

つまり、スノークールライスファクトリー構想を成功に導いたものは、他の地域や他のタイミングでは絶対に起こり得ないいくつかの要因の重なりという“偶然”と、しがらみなどなしに、沼田町をよくしたいと願う人々が生み出した沼田町の総意という“必然”の重なりである。

しかし、やはりここで強調すべきことは、他には起こり得なかった偶発性の色が強いことである。そもそも成功事例というものの考察は、結果論としてそれを成立せしめたいくつかの要素の重なり、つまり偶発性に帰結することが多いが、このスノークールライスファクトリーの成功事例も例外ではない。この事例を成功させた“偶然”の要素には、そもそも沼田町にコンスタントに雪が降ることにはじまり、ウルグアイラウンド対策費という高率補助の可能性が出たこと、道庁等関係機関との交渉の中で見出した雪というアイデアの出現、媚山政良室蘭工業大学教授との出会い、過疎債などの存在、全量納入を可能にした風土など、数えればきりがないくつもの要素がある。もちろん篠田町長をはじめ沼田町の多くの人々の努力も非常に大きいが、おおよそこれらによってスノークールライスファクトリー構想は前進・実現したといえよう。その偶発的要素の関連をまとめるとすれば、図 3-1 のようになる。

雪を利用する米の貯蔵施設建設はどこでも可能だが、それが広く拡大していない要因も、この点にその解を求めることができる。言い換えれば、特定の条件が揃った地域だからでき、他ではできないという不確実性が非常に大きいということである。もしこのような施設を他の市町村で作ることを望むのなら、その不確実性の縮減がなされなければならない。ここでその縮減に向けた手立ての全てを述べることはしないが、まず、制度を変えることはその大きな一歩になると考えられる。例えば、財政力の強くない市町村が同様の施設を作る場合に助成金を上乗せするようになれば不確実性は多少なりとも縮減されよう。

図 3-1 スノークールライスファクトリー要因関連図



筆者作成

最後に述べておきたいことは、スノークールライスファクトリー事業に関わった全ての人の努力に敬意を表するとともに、このような先進的事例が他の市町村にも広まることを願っているということである。そのためには、この事例をより詳細に分析するとともに、そこにある不確実性を縮減するための策がもたらされるべきという声が出ること、われわれの暮らす地球の運命を左右するといっても過言ではない新エネルギーの重要性を認識する自治体や人々の中でそうすべきという気運が高まり、世論を形成するほどのものになることが、最も確実性の高いことであると考えます。